

地域に根ざしたプロスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で展望する：鹿島アントラーズの人文社会科学部地域史シンポジウム「スポーツの世界史—茨城からアジア，世界へ—」への参加，社会連携センターとのシンポジウム共同開催

〔事業責任者〕

(自治体等側) 株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー 代表取締役社長

小泉 文明

(大学側) 人文社会科学部・教授

澁谷 浩一

連携先

株式会社 鹿島アントラーズ FC

プロジェクト参加者

鈴木 秀樹 (株式会社鹿島アントラーズ FC

取締役 マーケティングダイレクター)

佐藤 沙希 (株式会社鹿島アントラーズ FC

マーケティンググループ セールsteam)

澁谷 浩一 (人文社会科学部・教授，地域史シンポジウムの企画・運営統括担当)

山田 桂子 (人文社会科学部・教授，地域史シンポジウム企画・運営担当)

中田 潤 (人文社会科学部・教授，地域シンポジウム運営，シンポジウムコーディネーター担当)

森下 嘉之 (人文社会科学部・准教授，地域シンポジウム運営，シンポジウム司会担当)

加藤 敏弘 (人文社会科学部・教授，鹿島アントラーズとの連携調整担当)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

例年人文社会科学部が主催している地域史

シンポジウムを，今年度は「スポーツの世界史—茨城からアジア，世界へ—」というタイトルで社会連携センターと共同開催し，鹿島アントラーズのゲストスピーカーに参加してもらい，地域に根ざしたスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で考え，今後の連携関係を視野に入れながら展望する。

②連携の方法及び具体的な活動計画

2月の地域史シンポジウム開催が活動の中心になる。人文社会科学部のプロジェクト参加メンバーがシンポジウムの内容・構成について検討を行い，鹿島アントラーズ側とも調整を行いながら詰めてゆく。

③期待される成果

プロスポーツチームと大学の連携事業は，当然のことながら通常は地域活性化の視点から論じられる。本プロジェクトでは，これを，歴史をさかのぼり，視野を茨城からアジア，さらには世界に広げて振り返ることで，地域におけるスポーツが果たす役割について新たな展望を見出す契機となることが期待される。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

年度の前半は、プロジェクトメンバーが会合を重ね、シンポジウムの企画・構成を立案し、講演者の選定、テーマ設定を行った。

年度後半、シンポジウムの内容・講演者を確定し、チラシ・ポスターの作成発注を行った。運営統括担当の澁谷とシンポジウムコーディネーター担当の中田、アントラーズとの連携調整担当の加藤の3名が鹿島アントラーズを訪れ（11月28日）、シンポジウムの趣旨・内容、進め方についてアントラーズ側の佐藤沙希氏（マーケティンググループ セールsteam）と打ち合わせを行った。

その後チラシ・ポスターの関係各所への送付、各種行事などでの配布という形で宣伝活動を行い、シンポジウム当日を迎えた。

2月16日のシンポジウム当日は12時からシンポジウム講演・報告者、運営担当者間で最終的な打ち合わせを行い、当日の進行、特に講演・報告者全員による総合討論の進め方についての確認を行った。



写真1：事前打ち合わせ風景

そして、13時から17時まで人文社会科学部講義棟10番教室においてシンポジウムを開催した。なお、当初は鹿島アントラーズを代表して、代表取締役社長小泉文明氏が講演予定であったが、当日急用により、同社取締

役マーケティングダイレクター鈴木秀樹氏が同じタイトルで講演を担当した。

当日のシンポジウムプログラムは以下の通りである。

・主催者挨拶：内田聡（人文社会科学部学部長）

・基調講演：スポーツ・戦争・アマチュアリズム — 岡部平太と飛田穂洲の軌跡から — 高嶋航（京都大学大学院文学研究科）



写真2：高嶋航氏基調講演風景①



写真3：高嶋航氏基調講演風景②

・特別講演：茨城からアジア・世界へ — 鹿島アントラーズFCの挑戦 — 鈴木秀樹（鹿島アントラーズ・エフ・シー マーケティングダイレクター）



写真4：鈴木秀樹氏特別講演風景①

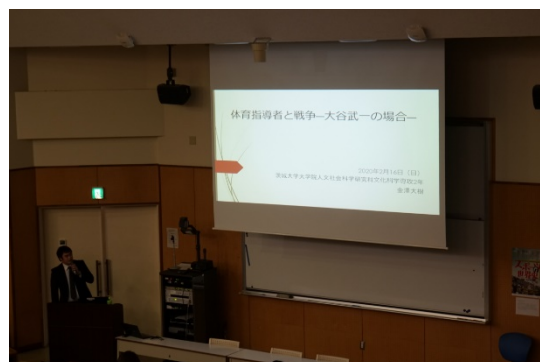


写真7：金澤大樹氏研究風景風景



写真5：鈴木秀樹氏特別講演風景②

・研究報告：スポーツの魅惑 —メディアが映し出したファシズム時代のイタリア—
新谷崇（茨城大学教育学部）

・総合討論：講演・報告者全員，コーディネーター：中田潤（茨城大学人文社会科学部）



写真8：総合討論風景①



写真6：新谷崇氏研究報告風景

・研究報告：体育指導者と戦争—大谷武一の場合— 金澤大樹（茨城大学大学院人文社会科学研究科大学院生）

・閉会挨拶：藤原貞朗（五浦美術文化研究所所長）

② プロジェクトの達成状況

シンポジウム当日はあいにくの悪天候の中約100名の参加者に集まっていた。水戸や茨城にゆかりのある戦前から戦後にかけて活躍した二人のアマチュアスポーツの指導者の軌跡を追った高嶋氏の基調講演やファシズム時代イタリアにおけるスポーツの実像に迫った新谷氏の研究報告，そして戦前から戦後にかけて活躍した日本の体育指導者に光を当てた金澤氏の研究報告など，戦争・ファシ

ズムの時代におけるスポーツの様相を取り上げた講演・報告の中で、鈴木秀樹氏による特別講演では、これまでのアントラーズの歩みを踏まえ、メルカリへの経営権譲渡という選択を敢えて行ったアントラーズの地域貢献へのビジョンが力強く語られた。



写真9：総合討論時会場風景

すべての登壇者にコーディネーター中田が加わった総合討論では、事前に回収した質問用紙にとどまらずフロアからも複数の発言がなされ盛り上がりを見せた。1930年代のヨーロッパ社会やスポーツと国家の関係に関するアカデミックなやり取りがなされた一方、プロスポーツの地域社会との共存の在り方、アマチュアとプロとの線引き・境界等をめぐって活発な議論がなされた。長い歴史的スパン、世界史的な視野の中でスポーツと地域の今後を展望するという本プロジェクトの当初の目的は一定程度達成されたと考える。

③ 今後の計画と課題

人文社会科学部主催の地域史シンポジウムは毎年時代とテーマを変えながら継続しており、来年度は近世日本史に関するテーマを取り上げる予定となっている。そのため、本プロジェクトの成果が来年以降に直接的に受け継がれるわけではない。しかしながら、本プロジェクトにおいて、近視眼的ではない形でスポーツの存在意義・役割について思考を深

めたことは今後の本学とアントラーズの連携事業の形を展望するうえで大きな意味を持つのではないかと考える。新たな連携の形を模索してゆくことが今後の課題となるだろう。



図：地域史シンポジウムチラシ・ポスター